



## 左遷も悪くない 3

η L P η η L I G η T

霧島まるは  
*Maruha Kirishima*



アルファライト文庫 

## 目次

番外編	エルメーテの日記	271
第2章	新兵との付き合い方	129
第1章	連隊長閣下 <sup>かつか</sup> は心配性	7

イレネオ || コンテ 20歳

コンテ家三男

体力も剣もそここの兵士。兄弟で一番空気が読める。

ミルコ || キツティ 17歳

越境して入隊してきた新兵。

普段はぼーっとしているが、時折非凡な才能を垣間見せる。

ジャンナ || アロ 16歳

ウリセスの妹。

甘ったれのわがまま娘。

ヴァレリア || アロ 23歳

ウリセスに嫁いだ貞淑な女性。

愛称はレーア。

父の命を助けたウリセスの話を繰り返して聞かされて育った。

ウリセス || アロ 29歳

実直すぎて下町舎に

左遷された主人公。

眼光鋭い優秀な軍人。

エルメーテ || バラッキ 23歳

ウリセスの補佐官。

要領のいい好青年だが、いささか腹黒い。

ルーベン || コンテ 25歳

コンテ家次男。軍の小隊長。

剣の腕は見事だが、

それ以外は多くの難あり。

セヴェーロ || コンテ 20歳

コンテ家四男

ウリセスに憧れて軍人となったが、体力が無い。

主な登場人物



# 第1章 連隊長かっか閣下は心配性

## 1 支えた男

「……」

ミルグラーフ王国の南西部。その地域の司令官であり、連隊長という肩書きを持つウリセスは、いつも通り軍の仕事を終え、冬の寒い道のをたどって家に帰りついた。そして玄關の扉を開けた時、最初に見たものは——妹のジャンナだった。

「あ、ウリセス兄さん、お帰りなさい」

夕食の準備でもしていたのだろう。右手の台所の方から小走りに駆けて来るその姿は、ごくごく日常的なもので違和感はない。

「……ああ、ただいま」

違和感があるとすれば、とウリセスは視線をゆっくりと動かした。最初は、ジャンナの後方の廊下に。次に食堂の扉に。最後は、二階へと続く階段に。

「あ、レーア義姉さんなら」

ウリセスの視線の意味に気づいたのだろう。ジャンナは、一瞬何かを思い出すような顔

をした後、こう言った。

「レーア義姉さんなら、具合が悪くて部屋で寝てるわよ」

「……早く言え」

妹の額に指をあて、ウリセスは軽く押すように小突いた。報告の優先順位がおかしいジャンナを置いて、彼は手燭の火をもらうや二階へと向かった。いつもより少しだけ足早になるのは、これが結婚して初めての出来事だったからだ。

いまから遡ることひと季節。秋の初めに、ウリセスとレーアは互いの顔も知らないまま、この田舎町のレミニで結婚した。ウリセスは元々中央の軍に所属していたのだが、有能ながら融通が利かないという性格を持ち、更に先の戦争で若くして出世してしまったために、非常に目障りな人間として上層部に疎まれた。そして、結果的にこの田舎町に左遷されることとなった。そんな鄙びた地でも、都から引きずってきた噂には悪い尾ひれがついて広まり、そして彼は孤立した。

そうして周囲のことなど気にせず、ただ兵士を鍛えることだけに注力して生きようと思っていたウリセスに降ってわいた縁談。その相手が、かつて戦場で命を救った兵士の娘、ヴァレリアことレーアだった。

てきぱきと仕事をこなす性質ではない彼女は、それでもひとつずつ着実に家事に励んだ。

そのおかげで、ウリセスは日々の生活を不自由に感じることはなかった。都の実家から家を出てきた妹のジャンナにも、レーアは粘り強く家事を身につけさせていた。

そんな妻は、これまで具合が悪いという理由で、家事を休んだことはない。余程悪いのだろうかと、ウリセスは階段を一步上るごとに心配になる。何しろ彼女はとても細身なのだ。少しは肉がついたと本人は言うが、ウリセスから見れば——触った感じも含めて、まだまだ全然足りていなかった。明らかに耐久性に難のある身体つきだったために、病気に對する抵抗力も足りないのでは、と彼は思っていた。

そしてついに、寝室の扉の前へとたどり着く。

「……」

ボタンと乗り込むわけにもいかず、ひとつ呼吸を整えた後、ウリセスはゆっくりと扉を開けた。

「……レーア？」

そして、出来る限り静かに声をかけた。しかし、返事はない。気配は感じるので、寝ているのだろう。手燭を掲げるが、寝台まで光が届かないため、彼は足を踏み出した。

後方で扉を閉め、一步一步ゆっくりと近づくと、寝台の掛布が盛り上がっている様子が灯りに浮かび上がる。二人で寝るには十分な広さの寝台の、右側。普段彼女が眠りにつく

側だ。ウリセスはいつもの癖で自分の寝る方に回ったが、彼女は反対を向いていて、細い背中しか見えなかった。もどかしさを募らせながら、ウリセスは改めて妻の前へと回る。

「……」

レーアは、やはり眠っていた。それは、最初から予想していたことだったが、蠟燭のオレンジ色の灯りでさえも、彼女の顔色の悪さは消し去れていなかった。

熱があるのかと、彼は膝をついて彼女の額に手を伸ばす。確かに少し熱いのが分かる。高熱というほどではないようだ。ただ、その表情には疲労が見て取れた。疲れがたまって、風邪でもひいたのだろうかと、推測の域を出ない考えをウリセスが脳裏に浮かべていると、その臉がぴくっと動いた。

「ウ………リセス？」

臉を震わせた後でゆっくりと開いて、オレンジ色の光を灯した緑の目が彼を見る。小さくて、消えてしまいそうな声だ。それが、更にウリセスの不安をかきたてる。

「ああ………大丈夫か？」

彼は医者ではない。具合が悪ければ、栄養をとって暖かくして寝る。それ以外の対処法は分からなかった。彼が出来ることはと言えば、妻に調子を尋ね、もしも手に負えないのであれば、医者を呼びに行くことくらいだ。

「すみません、眩暈めまいがひどくて……寒気が少し。寝ていれば治ると思うのですが……」  
 囁ささくように語る妻の顔に、もう一度触れる。熱を確認したかったのではなく、どこかに触れてやりたかった。

「メシは食べそうか？ 出来たら食べる」

「すみません……いまは……ジャンナにごめんなさいと、伝えてください」

「そんなことは気にしなくていい。少し寝ている。また来る」

顔に触れていた手を離し、彼は立ち上がった。「はい」と答える声を聞いてから、ウリスは来た時よりも大分ゆっくりとした足取りで部屋を出たのだった。

「……」

「……」

食堂でウリスは、妹と二人きりで夕食をとっていた。

こんな食事風景は、生まれて初めてだ。年の離れたジャンナと実家で暮らした期間は何となく、妹は妹でウリスを苦手に思い、二人きりになりながらなかった。

ジャンナがこの家に住むようになって、ぶつかりながらも多少は改善しつつある兄妹関係も、こうして二人きりになると、まだまだ確かなものを形作っていないのが分かる。二

人の間をレーアがしつかりつないでいてくれたのだと、思い知るばかりだった。

「あーもう……お通夜つなやみたい」

ほそつと、耐え切れなくなつたようにジャンナが呟く。

「レーア義姉さんの話でもいいから、少しは口を開けばいいじゃない。私がどうだったって聞いたのに、『寝かせてきた』しか答えないとか、それで話がおしまいとか！ 商売の基本でしょ、会話は！」

ぶすつとしながらも、一度しゃべり始めると妹の口は素早く回っていく。もっぱら、人をほめるより責めることが上手な口だ。そして、何だかんだ言っても、商家の娘だと思わせることを語る。残念ながら、軍人になるべく祖父に育てられたウリスには、その感覚は薄かったが。

「何か、食べやすいものを用意してくれるか？」

台所回りについて妹に聞けるようになったのは、助かることだった。家出してきた当初は、甘やかされて育ってきたせいで、包丁すらまともに握れないほどひどかった。野戦料理でも良ければ、ウリスの方がまだ食べられるものを作ることが出来ただろう。

「え？ ええと……」

突然、予想外の話が振られたため、ジャンナは焦あせった顔で落ち着かなく視線を動かしした。

台所に何があったか、そして自分に何が作れるのか、必死に考えようとしているのだろう。ウリセスは、食事を続けながら気長に返答を待つことにした。

「そ、そう！ リンゴの蜂蜜はちみつがけならどう？ 私が風邪をひくと、母さんがいつも作ってくれたの」

ジャンナが思い出したようにある食べ物の名を挙げたため、ウリセスはその記憶を呼び起こした。いまほど体力のなかった子供の頃に、一度だけ大風邪を引いたことがあった。

その時に、母が作ってくれたものだ。小さく刻まれたリンゴに蜂蜜が絡められているだけという、手間のかからないそれは、今日のレーアにも適切な食べ物のように思えた。

「ああ、いいな……それを頼めるか」

一緒にいた時間は短くとも、母の記憶はジャンナと共有出来るものなのだなどと、彼は少しだけ奇妙な気分になった。

「分かったわ。ふふ、おかしい。私が母さんと同じものを作って、ウリセス兄さんが母さんみたいに食べさせるんでしょ？ やだ……想像したらおかしくなってきた。都の兄さんが聞いたら、驚いた後で大笑いするわよ」

実家にいる長兄ランベルトを思い出したのでだろう。ジャンナは、けらけらと笑い出す。しかし、その笑いにウリセスがつけられることはなかった。

それよりも、「俺が食べさせるのか……？」と、思いもかけないことを言われ、見事に思考が停止してしまった。とても想像出来る光景ではなかった。

「あら、それくらいしてもいいんじゃない？ レーア義姉さん、泣いて喜ぶわよ」

それはない、と心の中で妹の言葉を即座に否定しながらも、ウリセスは返事をやめた。これ以上、何を言ったところでジャンナを喜ばせるだけだと分かっていた。

こうして、ウリセスにとって初めての妹と二人きりの夕食は、レーアと母が助けってくれたおかげで、穏やかに過ごすことが出来たのだった。

右手にはスプーンをつつこんだ小皿、左手には手燭。

そんな姿で、ウリセスは寝室へと戻ってきた。燭台しよたいに火を移すと、今度は最初からレーアの寝ている側へと回る。それから寝台の横に台を運び、その上に燭台とジャンナが作った皿を置く。

「ウリセス……？？」

大きな物音は立てないようにしたが、それでも彼女の眠りを妨げたようだ。瞼が薄く開き、唇が彼の名を呼ぶ。

「少しだけでも、食え」



ウリセスは、彼女の上半身を少し起こすべく、その首の後ろに手を入れた。

「あ……」

眩暈があるというので、出来るだけゆっくり起こしてやる。「大丈夫か」と確認すると、やはり眩暈が取れてはいないようで、彼女はウリセスのシャツを握って一度強く目を閉じた。

はあ、とその唇から長い吐息が漏れた後、再びゆっくりと目が開く。予想以上にひどいのかも知れない。

「医者を呼ぶか？」

「い、いいえ、大丈夫です……一口、いただきますから」

何も食べないと言ったら、すぐにでも医者と呼ばれると思ったのだろうか。レーアは少し慌てたように、ウリセスの意識を食べ物に持つていこうとする。ウリセスもとりあえずいまは、それで納得したふりをする。どういう理由にせよ、食べる気になったのはいいことだと思ったからだ。勿論、それと医者を呼ぶかどうかは、別問題だったが。

起き上がった彼女が、また寝台に倒れないように、ウリセスは彼女の背中側に横を向いて腰掛けた。そうすると、右の肩で彼女の背を支えられる。その体勢のまま、彼は台から小皿を取ってレーアに渡す。さすがにこの状態では、彼女に食べさせることは出来な



かった。出来たらやったのかと聞かれても、ウリセスは困っただろうが。

「これは……ジャンナが？」

「ああ」

皿の中を見て、レーアがふふと笑う。細かく刻まれたリングの中に、ジャンナが見えたのだろうか。

「うちは……誰かが具合が悪くなると、オレンジの蜂蜜漬けでした。余った分が欲しいのか、いつもイレネオとセヴィが枕元に来るので、全部食べた時でも残してました」

熱でぼうつとしたまましゃべっているのが分かる。彼女は普段、末の弟をセヴェーロと呼ぶが、今回はそうではなかったからだ。彼女の頭の中では、子供の頃の弟たちが枕元に迫ってきているのかもしれない。

「いいから食え。今日は残さなくてもいいぞ」

ここに、レーアの弟たちはいない。彼女の皿を狙う者は誰もいないのだから、残す必要はなかった。

「ふふ……そうですね。ウリセスも、これを食べたんですか？」

笑って、少し気分が良くなったのだろうか。レーアが、ぼそぼそではあるが、言葉を増やしていく。

「ああ……一度だけだが、な」

「アロ家の味ですね……いただきます」

もう一度、レーアはちよつとだけ笑って——やつと、それを口に運んだのだった。

## 2 動揺した男

翌朝になっても、レーアは寝台から起き上がれなかった。熱が上がりついている様子はないが、どうにも眩暈がひどいらしい。やはり昨夜の内に医者を呼ぶべきだったとウリセスは後悔したが、後悔ばかりしても仕方ない。

夜が明けきらぬ内に、彼は医者の家まで走って往診を頼んだ。髭の老医師は、カバンを取りに奥に戻ったかと思うと、口をもぐもぐ動かしながら戻ってきた。手には、ちゃんとカバンがある。申し訳ないと思ったが、向こうも慣れているのだろう。気にする様子もなく、口の中のものをゴクリと呑み込んで「行きましようか」とウリセスを促した。

診察が終わるまで、ウリセスは寒々とした廊下で待った。中から時折、医師がレーアに何かを尋ねているような声がするが、二人とも小さな声で、扉越しでは何も彼に伝えては

くれない。

ただ待つということがどれだけじれったいものであるかと思ひ知らされたところで、ようやく医師が寢室から出てきた。

「どうぞ、食堂の方に火を入れてます」

いまずぐ事情を聞きたいのは山々だが、ここは寢室の前。外から聞こえる声で、レーアを不安にさせるのは本意ではなかった。それに、ジャンナに朝食を余分に作るように伝えられている。食堂で話を聞くのが適切だとウリセスは考えた。階下に医師を案内すると、ジャンナがちょうど食卓の準備をしているところだった。

「こちらは?」

「妹です」

「おはようございます、先生。レーア義姉さんは、大丈夫ですか?」

ウリセスが切り出そうとしていたことを、ジャンナが待ちきれないように言葉にする。しかし、正直助かった。ゆっくりと席につき、ひと息ついてから話を始める空気が整うまで、まだ待つ必要があるかと思っていたのだから。

「大丈夫ですよ……と言っても、あまり樂觀視されても困りますが」

老医師は、穏やかな表情を少しだけ曇らせながら答える。ウリセスは、胃袋の裏がジ

リツとするのが分かった。

「とにかく、ひどい貧血を治さないとけません。出来るだけいろんなものを、たくさん食べさせてあげてください。野菜の少ない時期ですから、ごまや豆、卵なんかを多めにするのがよいでしょう」

ウリセスとジャンナの顔を交互に見ながら、医師は静かに語る。ウリセスの頭の中に、ごまと豆と卵が無造作に入り込んだ少し後。

ほんと、医師に肩を叩かれた。

そして——ウリセスともあろう者が、老医師によりにこやかな不意打ちを食らう羽目<sup>はめ</sup>となる。

「奥様は妊娠しておいでですよ。おめでとうございます」

世界中から、音が消えた気がした。

「おはようございます、連隊長閣下<sup>かちか</sup>」

「……ああ」

気がついたら、ウリセスは職場にいた。

自分でもよく分からない内に、いつも通りに準備して出勤したようだ。習慣というのは、

恐ろしいものだと思は後から思った。そして、どうしていま目の前にいるのがエルメーテなのかと、ついため息が漏れる。

「朝から不機嫌そうですな。大丈夫ですか？ ジャンナ嬢が何かやらかしましたか？」

さすがのエルメーテも、ウリセスの複雑な心境を読みきることは出来なかつたのだろう。ジャンナが聞いたら、怒り狂いそうなことを、見当外れに問いかけてくる。

「いや……」

ウリセスは自分の席につき、もう一度息を吐いてから、仕事に取り掛かる準備を始めた。不機嫌なつもりはないが、うまく考えがまとまるとも思えない。いまのウリセスは、仕事用に頭を切り替える方が楽に思えた。

「やつぱり変ですよ、大丈夫ですか？」

エルメーテに不審がられるほど、いまの彼はいつもの様子ではないようである。確かにそうだろうと自分でも分かっている。分かっているけど、すぐさま修正出来そうにはない。

「ああ」

少々殴られようが風雪にさらされようが、本当にウリセスは大丈夫なのだ。とにかく身体だけは頑強に鍛え上げた。しかし、レーアは違う。彼女は、ごく普通の女性に過ぎず、ウリセスと同じひとつの命でありながら、同じ強さを持ち合わせてはいない。殴られれば

砕けるし、風雪にさらされれば倒れるだろう。

そこまで考えて、ウリセスはいま自分がどういう状態であるのか分かつた。

彼は、動揺していたのだ。

これまで、彼が見てきた妊婦は、みな当たり前のような顔をして大きなおなかを抱えていた。一番身近だったのが、ジャンナを身ごもった時の母だ。随分遅く出来た子だっただけに、気苦労も多かったはずだが、母は大きなおなかで仕事に家事にと奔走していた。

その時の母の様子といまのレーアのあまりのギャップに、彼は動揺したのである。妊娠なんてものは、よほどの事情がない限り、勝手に腹の中で命が育ち、時期がきたら生まれてくるものと思っていたのだから。

だが、現実のレーアは寝台の中だった。彼女の血まで吸い上げ、貪欲に成長しようとする自分の子が、妻を干からびさせるのではないかと不安がよぎる。要するに、あんな風で最後まで大丈夫なのか？——そんな大きな疑問が、ウリセスを動転させたのだ。

それらの記憶、想像を全て押しやり、ウリセスは書類に向かい合った。ここでいま、彼が妻のために出来ることは、仕事しかなかった。右手で一発、自分の頬を叩いて動揺を追い払うと、ウリセスは重要書類の一番上を取る。

エルメーテは、しばらく不審の目を向けていたが、黙々と仕事を始めた男に声をかける

ことなく自分の仕事に戻ったのだった。

「連隊長閣下、帰りましょう」

ただひたすらに、仕事に打ち込んだ一日だった。

気づけば定時を越え、エルメーテが声をかけてくる。だが、今日は彼がウリセスの家に夕食を食べにくる日、というわけではない。だから、まるで一緒に帰るかのような誘いをかけてくる必要はないはずだった。

「先に帰れ」

最後の書類に署名を終え、ウリセスは視線も上げずに答える。仕事に意識を切り替えて一日を過ごしたため、まだ私的な状況について、心の整理ができていなかった。

「ああ、先に……ですね。いいですよ。それでしたら、ちよつと閣下の家に立ち寄ることをお許しください」

書類をとんとんと整え、上に文鎮を置いたエルメーテが、何食わぬ顔でそんなことを言い出す。さすがに、これには視線を上げた。

「来るな。取り込み中だ」

「そんなことは分かっていますよ。その件で、ちよつとジャンナ嬢に話を伺ってくるだけで

す。玄関先で伺ってすぐ帰りますから、閣下のご心配には及びません」

本人を目の前に、よくもまあ言えたものである。ペンを置き、ウリセスはようやく立ち上がった。

「嫌味か？」

「嫌味ですよ。一日中無表情で、仕事の話だつて『ああ』と『いや』としか返事されなかったのを、ご自分で知っておられますか？ 職場環境の改善が必要でしょうから、原因を突き止めてきます」

今日一日のウリセスの態度は、やはり良いものではなかったようだ。ここでエルメーテが突きつけているのは、さつさと白状せよ、さもなければジャンナから聞き出してくるぞ、ということだった。

彼の中で、まだ何の決着も得ていないその事案を、軽々しく口に出すのは憚られた。しかし、ずつとこんな調子で仕事をするわけにもいかない。エルメーテの情報収集能力を考えると、家に立ち寄りずとも近い内に嗅ぎつけてくるだろう。それらを考え、ウリセスは右手で自分の首を一度撫で、ため息をついた。

「レーアに……子が出来た」

それを言った瞬間の、エルメーテの顔ときたら。一瞬ぼかんとして、笑い出しそうに顔

をむにやむにやと歪めた後、その顔に手を当てて真顔に戻し、自分の机に片手をつけて身体を支えるや、肺の深い深いところからため息を落としたのだ。

「はああああ……良かった。全然、大したことじゃなかった」

そして、安堵の声で一人ごちるのである。その言葉には、ウリセスとしては十分異議ありだった。

「大したことはある。レーアが、寝台から起き上がれない」

彼女の血の量が改善するのに、一体何日かかるのかからないというのに。

「あ、ああ……血が足りてないんですか？ 何だ、そんなことなら、ちゃんと行ってくださいばいのに」

ウリセスの憂鬱など、取るに足らないものと言わんばかりの軽さで、エルメーテがいきなり動き出した。急ぐ手で外套を手に取るや、「お先に失礼します」と足早に帰り始めたのである。あつという間に、ウリセスは置き去りにされてしまった。

一人になり、ただただ静かな連隊長室を一度見回した後、いまさら席に座る気にもなれず、彼もまた帰ることにしたのだった。

### 3 頼られた男

「おかえりなさい、ウリセス兄さん……気持ち分かるけど、私の顔を見てため息つくのはやめて」

「いま帰った……すまん」

帰宅したウリセスを玄関先で迎えたのは、昨日と同じジャンナだけ。

レーアが、まだ起きられないことがそれで分かり、彼は素直に妹に詫言った。いまこの時、妹が家にいてくれることがどれほど心強いのか。何の落ち度もない自分の顔を見て、一番にため息をつかれるのは、妹にとっては理不尽だったのだろう。

「義姉さんには、ちゃんとご飯食べさせたからね。ごまは見つけられなかったけど、豆は買って来たわ。重かったんだから」

「ああ……助かる。本当に」

妹の肩に手を置いてねぎらいながらも、ウリセスの意識は二階へ行きかけていた。少しはレーアの顔色がましになったか、気になっていたのだ。

外套を脱いで外套かけにかけると、ウリセスは手燭を受け取り、階段を上り始めた。自分の部屋の前で、少し逡巡する。しかし、何も迷う必要もためらう意味もない。はあと息を吐いて、彼は扉を開けた。

「ウリセス？」

部屋の闇の中から、先に声が投げられて、ウリセスは驚いた。ただ、妻に呼びかけられただけで、これほど驚いたのは初めてだろう。

「起きていたか……」

「すみません、出迎えもせずに」

蠟燭の火の届かない寝台で、もそもそと起き上がろうとする気配。

「いい、そのままにしている。具合は少しはいいか？」

ウリセスは足を踏み入れ、部屋の燭台に火を移す。灯りが増え、部屋はようやく明るくなる。

「はい、朝よりは……お医者様まで呼んでいただいて、申し訳ありませんでした」

横たわったまま自分を見上げるレーアの言葉に、ウリセスは今朝のことを思い出した。医者の話を聞いた後、彼は一度部屋に着替えに戻ったはずなのだが、レーアと話をした記憶がない。呆然としたまま、仕事に行く準備をしたらしく、はつきりとしてはいないが、

おそらく彼女は寝ていたのだろう。

彼は寝台のレーアの側に周り、枕もとの台に手燭を置く。そうすると、不安そうな表情までよく見えた。

ウリセスは、軍服のまま寝台の端に腰掛け、身体をひねって妻と向き合う。だが、こうして彼女の目を見ていると、何を言いたかったかよく分からなくなる。結局——「……もっとメシを食え」という、使い古された言葉しか、掴み出せなかった。

「まあ」と、レーアがちよっとだけ笑った。ウリセスにしてみれば、笑い事ではないのだが。

「二人分、食え……でないと、俺の子に吸い尽くされるぞ」

だから、言葉を足す。「俺の子」という言葉を足した時、まさにその通りだと彼は思った。彼女の腹の中にいるのが、レーアに似ている子であれば、きっと母から吸い取る栄養の量も慎ましかかったに違いない。だが、彼女の腹の中にいるのが、自分の子だと考えたら、この吸い取りっぷりも納得出来る。

「ウリセスの子……そうですね、それならもつと沢山食べないと、全然足りませんね」

レーアも、同じ想像に行き着いたのか。少し笑って、それから手を掛布から出して彼に伸ばそうとする。ウリセスは、その手を取ってやった。外から帰って来た彼よりとても温

かな手で、逆に彼女が冷たい思いをするのではないかと心配になるほどだ。

「そうだ、俺の子に腹一杯食わせてやれ」

「俺の子」と言う度に、彼の中にひとつずつ石が積まれていく。

ウリセスにどれほど剣の力があるうとも、その身の中に子を宿すことは出来ない。どう逆立ちしても、彼には産めない。

だから、いまレーアの腹の中にいる子が自分の子だと言われても、すぐに実感出来るはずがない。もちろん、彼の子以外にありえないことはちゃんと分かっているが。

だが、レーアは違う。実感があるうがなかるうが、現実はその腹の中で子が育ち、良くも悪くも腹の中の出来事が全て彼女自身に跳ね返るのだ。だから、こうして具合が悪くもなる。

男であるウリセスはというと、実感を自分で積み重ねていくしかなかった。

だから彼は、「俺の子」と呼ぶ。レーアを苦しめてまで、食欲に生きようとする子を、我が子であると骨の髄まで自分に教え込もうとした。

「ああそれは……それは、本当に沢山食べなければ。ひもじい思いをしているのですね、この子は」

何ということでしょう、とレーアは驚いた顔になった。漠然とした意味合いではなく、

いままさに腹の子が飢えているのだと、はっきりと理解した表情だった。

「ああ……着替えたらメシを持ってくる」

ウリセスは触れた手を軽く揺らした後、手を離して立ち上がった。

それから軍服の上着を脱ごうと手をかけた時、階下が少し騒がしくなった。下にいるのは、ジャンナ一人だというのに。一人で騒いでいるのでなければ、誰か来たということだ。

「ちよっと下りる」

レーアにそう言い置いて、彼は急いで部屋を出たのだった。

「あ、連隊長閣下、さつきぶりです」

玄関にいたのは——エルメーテだった。ジャンナは、顔をむうとしたまま、彼の相手をウリセスに受け渡す。

ジャンナのこの顔は、いつものことだ。以前、エルメーテは妹にひどいことを言ったらしく、それ以来、彼が笑顔でジャンナに迎え入れられたことはない。最近になって、多少は軟化してきてはいるが、それでも妹は、前のようにのぼせた態度を見せることは微塵もなかった。

急いで走って来たのだろう。エルメーテは、まだ軍服のまま、白い息を弾ませていた。



「いまちょうど、ジャンナ嬢にこれの説明をしていたところです」

彼が「これ」と指すものは、ジャンナが手にしている陶製の小さな壺だ。

「だから、これは何なの？ 変な色とにおい」

蓋を開けて中を覗いたジャンナが、不審に表情を曇らせている。ウリセスからも中身が見えたが、とても綺麗とは言いがたい灰色と茶色の混じった、沼の土や粘土のような色だった。

「レバーのペーストだよ。これを毎食、パンに塗って食べさせてあげて」

「……その『レバー』って何って聞いているの」

これまで食べてきたものと明らかに違う色合いが、どうにも妹を気味悪がらせているようだ。

「レバーって……まあ、お肉の一部だよ」

詳細を——エルメーテは濁した。動物の臓物だとは、女性にはつきりとは言えなかったのだろう。動物の内臓は腐りやすく、普段肉屋にレバーが並ぶことはないため、身近とは言えない食材だった。秋のイノシシ駆除の時に、解体された端から肉と一緒に調理されていたことが、ウリセスにとって一番新しい記憶。野戦訓練で生きた鶏をさばいた時に食べたことが、古い記憶だった。ともあれ、栄養価は高いものの、動物の内臓というだけで、

慣れていない女性が拒絶反応を起こす可能性は高い。

「うち特製でね、うちの母さんも義姉さんも、これのおかげで眩暈知らずっていう優れものさ」

代々バラツキ家で、妊婦を助けてきた秘伝の一品と聞かされて、ウリセスの方が真面目に聞き入ってしまった。パンに塗って食べればいいという手軽さも助かる。

「冬で良かったよ。寒さのおかげで、数日保存が出来るからね。温かくならないところに置いておいて。なくなる頃に、また持ってくるから」

そう言ってまだ訝しげな顔をしているジャンナとの話を切り上げると、エルメーテはウリセスの方へと向き直った。

「夜分、お騒がせして申し訳ありませんでした。ではこれで……」

「おい」

てきぱきと早口で帰りの口上を述べようとする男を、ウリセスはひと言で縫いとめた。

「礼くらい言わせろ。それと、わざわざ来たんだ……メシも食っていけ。ジャンナ、用意してやれ」

壺を持ち上げて、くるくる回しながら眺めていたジャンナに話を振ると、彼女は一度ちらとエルメーテを見た後、「はあい」と物言いたげに答えて、台所へと消えて行った。

「あー、すみません、本当にすぐ帰るつもりだったんですよ」

玄関で苦笑いしている男に、「そんなことより」と、ウリセスは自分の話を持ち出した。「そんなことより……助かった」

ジャンナがいてくれることを有難いと思ったが、まさか妻の妊娠に関して、エルメーテにまで感謝することになるとは思わなかった。

「いえいえ、どういたしまして。こんなこと、お安い御用ですよ」

そう言つて笑みを浮かべる補佐官を前に、お安い御用とは、便利な言葉だとウリセスは思った。エルメーテという男は、日常生活においては出来ることが本当に多い男だ。そんな男には、お安い御用というものがゴロゴロある。

一方、ウリセスは軍務にこそ幅広く対応出来るが、日常生活では出来ないことが多々ある。妻の妊娠という事案に関しては、本当に役立たずだ。

「後で、この辺でも手に入る、お薦めの食材を書き出しておきますね」

更にそう言い募る補佐官に、ウリセスはどうやって感謝を伝えるべきかと考えた。そして、彼らしく言う言つた。

「困ったことがあったら、俺を呼べ」

「うわあ……そんな物騒な困りごとはいまのところないです」

ウリセスなりに考えた言葉だったが、エルメーテには腕つぶしという意味でしか受け入れられなかったようだ。確かに、ウリセスが役立てそうなことはそう多くはなかった。

「でも、もしそんなことがあったら、まっさきに助けを求めますよ。僕には、自分ひとりで身体を張ろうなんて殊勝な考えはありませんから」

そして、「寒いです。お話は、暖かい部屋がいいです」と付け足され、ウリセスは苦笑を浮かべながら、エルメーテを食堂へ招き入れたのだった。

「まあ、これは何ですか？」

寝台から半身を起こしたレーアに、「豆と野菜がたっぷり入ったスープと、エルメーテからの差し入れを塗ったパンを出してやると、彼女は案の定、パンの上の粘土もどきをしげしげと見つめた。

「……レバーだ」

「レバー……聞いたことはあるような、何でしたっけ」

「肉の……まあ、肉だ。エルメーテが持つて来たから、心配はいらない」

「そう、なんですか？ それじゃあ、いただきます」

レーアは、噛み付いてくるはずもないパンに、おっかなびっくり、逆にゆっくりと噛み

付いた。

「……」

微妙な顔で噛み締めている。エルメーテが持つてくるのだから、極端に味がおかしいということはないだろうが、かといってとてもおいしいというものでもないようだ。

「……何とか、独特の匂いがありますね。それ以外は、多分……大丈夫です」

もともと食べ続ける妻の様子に、ウリセスはほっとした。全部食べ終わるまで見届けると、更にほっとする。

「お仕事で疲れているウリセスの手を煩わせて、本当に心苦しいです」

「俺の子がレーアの身体を煩わせて、心苦しいと言って欲しいか？」

「いいえ、いいえ、そんな」

あまりに妻が小さくなってしまったので、冗談だとウリセスはその肩を軽く叩いた。

「うんと食べ、無理はするな。ジャンナも……俺もいる」

「はい、はい……ありがとうございます」

妻に、頼りにしていますという瞳で見つめられるのは——男としての誉れのひとつなのだ、この時ウリセスは知ったのだった。

その後、レバーが動物の内臓であることをイレネオから聞いたらしく、女二人の間で小さな騒動が起きたようだ。だが、その頃にはすっかりレーアは貧血知らずとなっていて、パンに塗られたそれを見る目こそ変わったものの、「食べない」という選択肢はないようで、毎回覚悟を決めてえいやと噛み付いている。

食堂でのそんな姿を見るのが、最近のウリセスの小さな楽しみのひとつとなっていたことを、妻は知る由もなかった。

#### 4 おまもりをもらった女

レーアの妊娠話は、ひそやかに身内に伝わっていったが、それで何か大きな変化があったわけではない。

レーアの母が一度、食事のおすそ分けという形で様子を見に来た。その頃には彼女はもう起きられるようになっており、大きな心配をかけずに済んだ。臍物を食べているということに複雑な気分はあったが、レバーに感謝するレーアだった。

コンテ家は男兄弟ばかりで、彼らが現時点でレーアの妊娠に対して何らかの行動を起こ

すとは、彼女は思っていなかったし、実際その通りだった。

そう——男兄弟は。

昼間、アロ家の玄関がノックされた時、一番近くにいたのはレーアではなかった。「はい、どちらさま？」とジャンナが反応している声が聞こえてくる。台所にいたレーアもまた、玄関へと向かった。ジャンナでは分からないお客の可能性もあったし、悪人と気づかずにはうっかり扉を開けてしまう危険もあったからだ。

「どちらさま？」

レーアが到着した時、ジャンナは無謀にも扉を開けていた——なんてことはなかった。彼女は、「どちらさま？」ともう一度問いかけているが、扉の向こうから返事はない。そのためジャンナは、眉間にうっすら怪訝な皺を刻んで、扉の向こうを睨みつけている。

返事の代わりに、コン、コココンというリズムでノックされる音がレーアの耳に届いた。

「あっ！」

その音に、慌ててレーアは足を踏み出した。「え、レーア義姉さん？」と驚くジャンナの横から手を伸ばし、彼女はおもむろに鍵を開けて扉を開く。

そこには、淡い金髪の女性が立っていた。抜けるほど色が白く、青い瞳はぱっちりして

いて高級な人形のように可愛らしい。背の低いそのお客を、最初ジャンナは見つけきれなかったようで、キョロキョロした後には視線を下ろした。

「まあ、可愛い子。どこのお遣いかしら」

レーアよりもっと背が低いため、背の高いジャンナからすると、ちよつと膝をかかめてちょうどいいくらいだ。甥や姪を可愛がるかのように、彼女は少し小さなお客様に視線を下げたのだ。

そんな義妹を尻目にレーアは、その小さくも可愛らしい女性に問いかける。

「ピエラ義姉さん、今日はどうなさったのですか？」

「え？」と、レーアの横でジャンナが驚きに震えた。

「え？ 義姉……え？」

落ち着かない視線で、ジャンナはレーアを見たり、お客を見たりと忙しそうにしている。客人の方も、興味深そうにジャンナを見上げている。

「ピエラ義姉さん、こちら夫の妹のジャンナです。ジャンナ……こちらは、トビア兄さんの奥さんよ」

「ええっ!？」

初対面の二人がお互いを分かるように紹介したのに、ジャンナはあまりに正直過ぎた。

本人を目の前に心底びつくりした声をあげた拳句、二度見どころか三度も四度も見るのである。

「ピエラ義姉さんは、二十歳よ……ジャンナより年上。ほらご挨拶して」

失礼過ぎる義妹の背中を叩いて、しゃんとさせる。こんなことをレーアが冗談で言う必要はない。ただ、気持ちちは分らないでもなかった。見た目だけで言えば、ジャンナの方が遙かに年上に見えるだろう。

「じゃ、ジャンナIIアロです……この主、ウリセスの妹です。ようこそ、いらっしやいました」

戸惑いながら、ジャンナが探るような挨拶をする。まだまだジャンナには、礼儀をきちんと身に着けさせなければならなかった。

「……」

そんなジャンナにこりと微笑んで、ピエラが会釈する。

「ピエラ義姉さんは、声が出ないの。だから、ノックで誰かを知らせてくれるのよ。ジャンナも覚えていてね」

訪問者の態度を不審に思われる前に、レーアは言わなければならないことをさっくりと説明した。

「わ、分かったわ」

多くの戸惑いがある内にそんな情報を提供したため、ジャンナはもはや何に戸惑っていないのかもよく分らない状態だった。逆に、それで良かったのではないかとレーアは思った。レーアもまた、人に義姉のことを説明するのは、慣れていなかった。上手に説明出来たかどうか、自分でもよく分からない。

「ピエラ義姉さん、寒い中どうなされたんですか？ あ、とりあえず入ってください。すぐ暖炉に火を入れますから」

そんな自分の中の戸惑いを誤魔化すように、レーアは兄の妻を招き入れたのだった。

ピエラのことを、レーアは昔から良く知っている。

七年前、この街に引っ越して来たその日に挨拶をしたのだ。彼女は、隣の家の娘だった。三人兄妹の末娘だったが、ピエラはいつも家族に不安な目で見つめられていた。

「こんな娘で、貰い手があるだろうか」「器量は良いが、まともな結婚は無理かもしれん」——時々聞こえてくる隣家の会話に、レーアも心を痛めたものだ。

成長しても少女のような可愛らしさを残すピエラは、金持ちの男に何度となく求婚されていたという。男と言っても、三倍以上年の離れた、もはや老人と言ってもよい相手だ。

## 立ち読みサンプル はここまで